

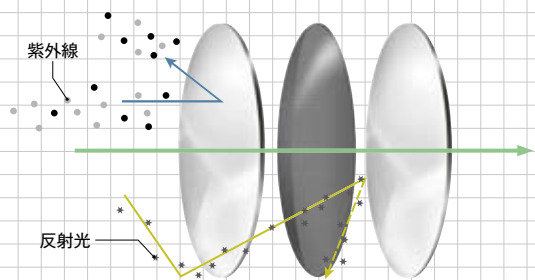
溪流と偏光グラス



偏光レンズで見え方はここまで変わる

写真は溪流でTALEXレンズを使用した場合と、しなかった場合の比較例。水は太陽光を強く反射するため、「照り返し」現象が発生する。偏光レンズなしに溪流を歩くと、ポイントが見通しにくい、底石の位置を把握しにくいという釣りの面での問題だけでなく、正確な水深が分かりにくいために安全面での問題も起きやすい。偏光グラスが必須と言われるのはそのためだ。

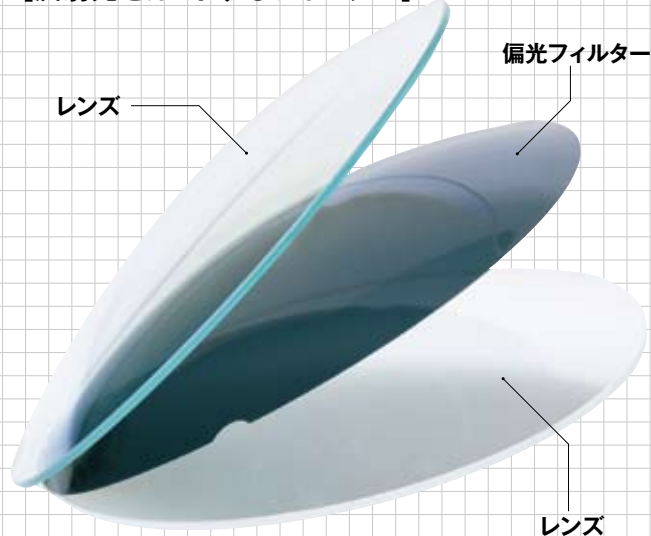
【二種類の眩しさをカットする】



眩しくないのによく見える仕組み

釣りに限らず、日常的に目には2種類の「眩しさ」が入り込んでいる。太陽光から直接的に目に入る自然光と、水面・路面などの照り返しで発生する反射光だ。まず自然光は単純にサングラスの色の濃度を上げることで遮断できるのだが、反射光はそれでは遮断しにくい。一般的なサングラスを溪流で使う人がいないのはこのため。TALEXレンズは、この反射光を遮断するために薄さ0.03mmの偏光フィルターを採用し、光学性能に優れた2枚のレンズで挟むことで「眩しくない、よく見える、疲れない」といった視界を実現している。

【反射光をカットするフィルター】



流れの規模と太陽光

ひと言で「川」と言っても、その規模は様々だ。市街地を流れる本流域では遮蔽物が少なく、陽射しは非常に強い。中流域～谷の中を流れる山岳溪流域へと向かうにつれ、遮蔽物が多くなるために陽射しが弱くなる傾向がある。まず釣り用のレンズを選ぶには「自分が釣りをするフィールド」をよく考えよう。



変化する天候

流れの規模と同時に、釣りの時間帯や天候も考慮したいところ。雨の中、好んで釣りをする人は少ないが、実際、溪流ではドビーカンの晴れよりも、やや曇りのコンディションの方が釣りやすい。また朝夕マヅメの暗い時間帯はトラウトフィッシングには欠かせない。レンズカラーはこういった要素にもかかわってくる。

「釣りをする川の規模や日陰の状況、また天候、そして人の年齢によっても『見えるカラー』は変わってきます。私は基本的にはナチュラルに見えるものと、明るく見えるものをすすめていますが、人によって光の感じ方が違うということを常に感じます。そこで、実際に専門店へ、目で見て選ぶ、必要性があるんです」

偏光レンズには色がついているが、単純に暗褐色であれば光を通さない、というわけではないようだ。太陽光を防ぐだけの一般的なサングラスと異なり、偏光グラスはその、偏光度合いが重要になる。上と次のページでは、TALEXレンズの遮光の仕組みとカラー別の見え方の一例を紹介してみたい。ぜひ見ていただきたい。

川や目の個性に合わせてレンズを選ぶ必要がある

岩陰や白波の中から飛び出してくる魚を一瞬で補足し、反応させて釣る。溪流ルアーは非常にスピーディーで、瞬発力を求められる釣りだ。だが、肝心の沈み石が、魚が見えていなければ、アングラーの瞬発力は意味をなさない。水面下の世界を的確に把握する。実際に魚を釣るうえでも安全を確保するという面でも、偏光グラスは欠かせないアイテムと言えるだろう。

僕は、フィールドの状況や自分の目に合った偏光グラスを使う必要があるはずだ。ここでは世界的偏光レンズブランド・TALEXのプロショップスタッフに「溪流に適したレンズ・フレーム」の話を聞いてみた。今回解説してくれた、イリエメガネ代表の入江さんはこう言う。

「釣りをする川の規模や日陰の状況、また天候、そして人の年齢によっても『見えるカラー』は変わってきます。私は基本的にはナチュラルに見えるものと、明るく見えるものをすすめていますが、人によって光の感じ方が違うということを常に感じます。そこで、実際に専門店へ、目で見て選ぶ、必要性があるんです」

偏光レンズには色がついているが、単純に暗褐色であれば光を通さない、というわけではないようだ。太陽光を防ぐだけの一般的なサングラスと異なり、偏光グラスはその、偏光度合いが重要になる。上と次のページでは、TALEXレンズの遮光の仕組みとカラー別の見え方の一例を紹介してみたい。ぜひ見ていただきたい。



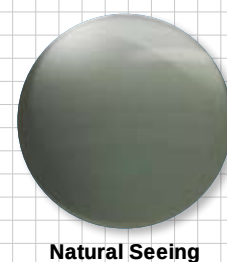
溪流を“視”る Sight Fishing

フィールドを制する
本当の視界とは？

見える偏光グラスを考える

水面のギラつきを抑え、障害物の有無、水深を測る。溪流をクリアに見通すために、偏光グラスは欠かすことのできないアイテムだ。では、視認性が高く、疲れにくい眼鏡とはどういったものだろう？世界的偏光レンズブランド「TALEX」のプロショップに溪流用レンズの話を聞いた。

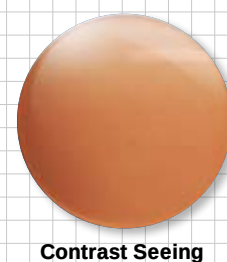
Support by TALEX <http://www.talex.co.jp/>
Text & Photographs by Lure Magazine River



Natural Seeing



Bright Seeing



Contrast Seeing

イリエメガネ東店

関東・東北の釣り人も多く訪れるザ・レンズ TALEXのプロショップ。多くの偏光グラスを取り揃える。眼鏡を作る際には、徒歩1分の五行川で実際の偏光度合いをスタッフと共にチェックでき、カラー選びも困ることなし。

〒321-4305
栃木県真岡市荒町3-39-1
TEL : 0285-84-4147
<http://www.iriemegane.com/higashiten.html>



解説 入江輝行さん
Teruyuki Irie

イリエメガネ代表。鬼怒川本流、福島県の溪流、丸沼にも通うフライフィッシャー。豊かな釣りの経験と眼鏡・レンズへの知識を元に解説してくれた。

自分に合ったフレームとタイプを選ぶ

〔 **実際の眼鏡**をチェックして作る〕



一眼タイプ、跳ね上げタイプのもなど、偏光グラスは種類も様々。自分の視力やスタイルに合わせて、適したタイプを選びたい。

細かな調整のもとに作る

視力の悪い人は、まず現状で使っている眼鏡のレンズ・フレームを専門店に持ち込んでチェックするのがベストであるようだ。目の距離、掛け方によっては、眼鏡の度数と偏光グラスの度数で若干の微修正が必要になる場合もある。度付きレンズ＆フレームを作る場合、10日間～2週間ほどの余裕を見てほしい、と入江さん。「眼鏡は“ひずみ”をなくすように作りますので、機械削りと、最終的には手削りという行程を入れて製作していきます」。



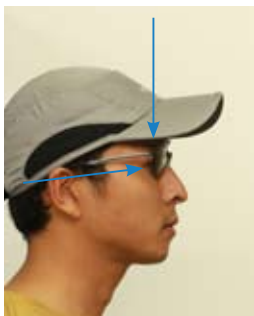
〔 **大きめのフレーム**が適 〕



偏光グラスは純粋なファッショングラス、というわけではない。照り返しによる反射光を的確に遮断するにはフレームの大きさが重要になるようだ。

上・左右からの光を意識する

一般的な眼鏡は無色レンズを使用しているため、フレームが小さく、レンズ以外の部分がばやけていてもさほど気になるものではない。しかし、これが偏光グラスになると話は別。光は上・横方向から視野に侵入しやすいため、小さなフレームではストレスを感じやすくなってしまうのだ。また、魚の反応は常に視野の中心で起きるわけではなく、横目でそれを捉える場合もある。偏光グラスは大きめのフレームが好ましい。



■視力・スタイルによってタイプを分けられる



様々なバリエーション

TALEXレンズには度付き・度なしで様々なタイプのものがある。度なしのものでは、3種のレンズ素材とカーブがある。また度付きではコストパフォーマンスに優れたスタンダードタイプ。視界のゆがみを抑え、度数が強い場合でも薄く仕上げられる薄型非球面タイプ、さらに優れたデザイン性に加え、横方向からの光をシャットアウトするハイカーブタイプなど選択の幅が広いのも嬉しいところだ。また遠近両用のものも多数ラインアップがあるので、自分の視力・スタイルに合わせたものを選ぶことができる。

「運動中や遮蔽物の少ない渓流域では、ナチュラルに見えるトゥルービュースポーツがとて見やすいカラーになると考えています。と同時に、トラウトフィッシングは使用するラインやモノが非常に繊細です。とくに暗いシーンでは明るく見えるイーズグリーンが効果的でしょう。私も実際に釣りをしますので、現場での使用感を踏まえて、最初の一本はトゥルービュースポーツ、次の段階としてイーズグリーンをおすすめしています」

このようなカラーに加えて、細かいタイプ選びも重要になると入江さんは言う。裸眼の人は、もちろん度なしのレンズ＆フレームでOK。だが、視力の度数は人それぞれ、目が悪い人の中でも眼鏡やコンタクトなど、スタイルもまた別々だ。

普段、日常的にコンタクトレンズを使用している人は、釣りの際に度付きの偏光グラスを着用すると、眼鏡の度数の強さを感じる場合が多い。そんな人はコンタクト+度なしのレンズを選ぶのがよいようだ。また、眼鏡の人でも普段使いの眼鏡と偏光グラスでは見え方が違うため、度付きレンズ+フレームを選ぶ際にも、視力検査やフレームとの相性選びが欠かせない。

偏光グラスは、シチュエーションや使う人に合わせて非常に細やかに進化してきた。それは溪流ルアーと同様とも言える。偏光グラスはひとつの「タックル」だ。自分の釣りに最適な、そして自分の目にふさわしいタックルを選んでみてほしい。

レンズカラーによって異なる役割

Natural Seeing >> 自然のままの色で見る



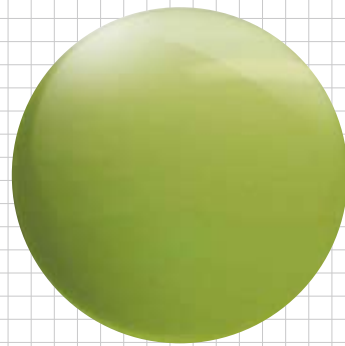
トゥルービュースポーツ

まず初めの一本として、入江さんのおすすめするのがこのカラー。「トゥルービュー」にブラウンを配色することで、若干明るく感じられ、また輪郭強調性能を付加されたカラーだ。薄曇り～晴天時での使用に強く、マルチに使うことができる。強い日差しによる水面の輝きと陰が交錯するような状況でも安定した視界を提供してくれるカラー。実際のシーンでは里川、ボサ川など市街地型河川、また比較的川幅が広い一般的な溪流で使いやすい。また、このトゥルービュースポーツは釣行だけでなく、運転時のストレスを軽減してくれる優れたカラーレンズだ。



遮蔽物が比較的不多い、明るく開けた渓流域では、ナチュラルなカラーが使いやすい。

Bright Seeing >> 明るく鮮明に見る



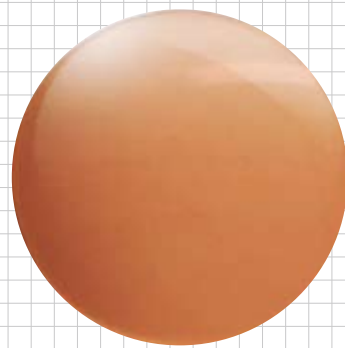
イーズグリーン

溪流は天候が変化しやすい環境だ。曇天や雨天など暗いコンディション下で視界を明るくしてくれるのが、このグリーン系カラーである。谷が深く、昼間でも太陽光が入りにくい山岳溪流のような場所でも、暗さを感じにくいレンズは必携と言えるだろう。また、これは魚たちの活性が高い朝夕のマヅメ時にも効果的なカラー。解説してくれた入江さんは溪流ではイーズグリーンをメインに使用しているが、それには理由があった。「目の見え方・明るさの感じ方は年齢と共に変化します。年齢が50歳を超えると若い人に比べて、暗さに弱くなる傾向があるんです」。



谷が深く、極端に遮蔽物の多いエリアでは明るく見えるレンズカラーが効果を発揮する。

Contrast Seeing >> シャープにクリアに見る



アクションコパー

基本的に、溪流釣りにはトゥルービュースポーツとイーズグリーンの2色をベーシックとしておすすめする入江さんだが、時に違うカラーをすすめることも。これはコントラストを強調するカラーのアクションコパー。可視光線ゾーンの波長曲線の急激な変化を抑えることにより、シャープに見えるのに疲れにくく、かつ目に優しいカラーだ。「檜原湖などでバスを狙うお客さんもいらっしゃいますが、そこではアクションコパーが効くという方います」。溪流に比べ、水中の見通しが悪くなりがちな本流や湖では、ハイコントラストカラーも有効だろう。



マディで水中の様子が分かりにくい本流・湖ではコントラストを強調するカラーも有効だ。

見え方はひとり一人違う

ほんとうのサングラスを、かけたことがありますか？



だからそこで専門店で目を見る必要があるんです

目の見え方・光の感じ方はひとり一人異なる、と入江さん。おすすめのカラーを解説する中で、さらに明るさ・暗さを求める人に対応してレンズを選ぶ。さらに、偏光グラスはフレームとの相性も重要になるようだ。「耳への接触・汗での滑り・顔に対しての大きさもしっかりチェックしたうえで、作ることが重要です。せっかくストレスのないレンズ選びをしているので、フレームがそれを壊してしまうことがないように配慮しています」。



屋内でも偏光度合いをチェック

基本的に偏光グラスのカラーは外で実際に掛け、選ぶのがベストだが、荒天時などは屋内でも専用のボックスで見え方をチェックできる。安心のシステムだ。